

令和4年度 第2回障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会について（概要）

【日 時】 令和5年1月19日（木） 13:00～15:00

【場 所】 檜山合同庁舎4階 講堂

議 題

【当委員会に寄せられた質問事項～障がい者の移動支援について】

メールで寄せられた質問（一般の方）への対応を行った旨の報告。

管内の福祉タクシーや各町で行っている移動支援等について説明した。

【市町村条例等における障がい者への制限条項について】

障がい当事者団体の調査により、「会議の傍聴規則等において精神障がい者への差別的表現や規制が記されたものが、現在も見られる」と報告されていることを紹介。

障がい者差別の解消や合理的配慮の提供を考えると、今後何らかの是正がされていくと考えられ、追って動向をお知らせする旨を説明。

【地域課題「8050問題」について】

～管内であった事例（長期引きこもりの高齢化ケースを紹介）～

(1) ケースのライフステージに沿って、それぞれの場面での支援はどうだったのか？場面ごとの実態を検証していく

◆ステージ1（18歳まで）

・家族に守られた生活。遅れに気づく場面はあったが、両親からの発信（困り感）はなかった。

◆ステージ2（～25歳まで）

・高校卒業後就職し町外に出る。単身生活。環境が変わる中、本人の社会的不適応が見られるようになった。就職⇒まもなく離職。相談する人がいなかった。悩みを一人で抱えていた生活。

・成人後に検査の結果、療育手帳該当となることが分かった。

◆ステージ3（～40代現在まで）

・障がいと向き合い自分から相談機関に足を運んだ。障害年金の手続きを進めようとしたが、家族からの理解が得られず制度不活用となった。

・そのまま引きこもりとなり、親ともども高齢化を迎えている。

(2) 現在40・50代のケース…幼少期の支援体制が整っていなかったことから、大人になった今、状況把握ができていない。

⇒背景を検証していく…ケースの解決策ではなく、地域で何ができるのか？が重要になる。



意見交換の中で、以下のような意見が聞かれた

背景は？

- ◆本人の状況について、家族を含め周囲の支援者の気づきはどうかだったのか。関係機関の介入の難しさを痛感した。
- ◆ライフステージを進める中で、つまずいた時に相談支援できる存在が近くにいなかった。本人が困り感を感じ、自己発信できたのに、家族が障がいを受け止められず、本人の自立につながらなかった。
- ◆引きこもり状態の子どもだけでなく、関わる親や家族も含めてケアが必要だったのでは。家族に対して誰がアプローチして、本人の思いを汲み取っていくことができたのか？
そういった支援者がいなかったのではないか？
- ◆意思決定支援の視点も含めて、ニーズ把握ができていなかった。
- ◆こういったケースの掘り起こしにつながっていない町もあるのでは。(地域性もある?)

何が必要だったのか？

- ◆意思決定支援は、本人からの発信が重要であり、支援者からの押し付けになってはいけないし、手を差しのべる準備は必要。
⇒親なき後の障がい者の暮らしを守るため、地域生活支援拠点の取り組みが必要。
- ◆最終的にはセイフティーネットとして生活保護制度はあるが…。
- ◆本人たちの状況が悪化する前から、関係機関が状況を把握し、必要なタイミングで介入できる仕組みがあれば望ましい。
- ◆自分も将来が不安になった時がある。自分から発信する勇気を持たなければと思っているが簡単にはできないことも分かってほしい。(当事者談)

《ケースのライフステージ》

ステージが変わっていく過程…その場面に応じた支援は？

実態を把握した支援体制は？

